

ラポールについて

—— いまの心理療法は F.A. メスメルを先を歩めているのか ——

佐 渡 忠 洋

I はじめに

ラポール (rapport) とは、心理療法家が訓練のはじめに学ぶ専門用語の 1 つである。これはラテン語の *apportare* を語源とし、心理療法における治療関係を言いあらわす意味では最初にフランスで使われた。精神医学史家の H.F. エレンベルガーは、力動的な心理療法の歴史描出にあたって F.A. メスメル (Franz Anton Mesmer: 1734 ~ 1815) をとりあげ、メスメルの主要な業績を「磁気術師 [= 治療者] と患者の間にある“ラポール (交流)”の発見である」と述べている¹⁾。筆者は臨床心理学の研究をすすめる、心理療法の仕事に自らたずさわらななかで、このラポールをあらためて真剣に考えるようになった。そして、メスメルの業績を調査する過程で、この奇妙な医師の実践にいまの心理療法と共通するものを認めるにいたった。調べたかぎり、メスメルが著作のなかで《ラポール》の語を使っている箇所を筆者はみつけられなかったのだけれど、このラポールという臨床的事態を考究するには、やはりメスメルの仕事に目を向けねばならないだろう。

そこで本稿では、メスメルの症例を分析し、現代心理療法におけるラポールの意義を歴史的観点から考察していきたい。

II メスメルと動物磁気 (magnétisme animal)

メスメルは 1734 年にドイツで生まれた。哲学と神学を修め、1759 年からウィーン大学で医学を学んだ。医師になったメスメルは 1766 年 (32 歳時)、『人体への惑星の影響について』²⁾ で医学博士をえた。そして、後述する動物磁気の仮説に辿りついた彼は、1770 年代から動物磁気師として開業し、ウィーンで、のちにパリで人びとの治療にあたった。治療者としてある種の評価をえた——またある種の嘲笑の的にもなっておりパロディ化もされていた——メスメルは、支持者と追従者からの助力で普遍調和協会 (Société de l'Harmonie Universelle) を立ち上げて活動するも、この理論への風当たりは強かった。1784 年、パリの医学会により動物磁気療法が明確に退けられたことが、アカデミズムでの立場を決定的に失う契機となる。1792 年にはパリの屋敷を引きはらい、晩年は出生の地コンスタンツで隠居、孤独にその生涯を閉じた³⁾。

動物磁気について、メスメルはたとえばこう述べている。「動物のからだにあって、天体の影響を受けたり、また磁石の作用との類比で示されたりするような、動物のからだをとり囲んでいる諸物体との相互作用を受容できるかのような特性」⁴⁾ ——この発想の源は彼の博士論文にみることができよう。この宇宙的万能薬たる動物磁気を操作でき、相手にその治療作用をもたらさう動物磁気師によって施される治療が、動物磁気療法ということである (図 1)。この作用により、患者は分利 (ク



図1 磁気術師と患者

(資料出典：メスマー (1885) 『動物電気論』、42 頁より)

リーズ) を起こしつつ、徐々に心身の変調が回復していくという。

メスマルが築いた治療法は、その後、ブライド (James Braid : 1795 ~ 1860) を経て催眠術へと発展して現在へといたる。そのため、今日のわれわれにどれほど怪しく見えようとも、これは一定の評価を受けるに値する。筆者は動物磁気理論の正しさを述べたいわけではない。歴史的にみて、メスマルと彼の理論が果たした役割、切りひらいた地平を評価しているのである。なお日本では、催眠術の名を最初に冠した書籍 (筆者が入手できたものなかで) は『魔術と催眠術』⁵⁾であった。これはメスメリズム (および催眠術) につきまとう怪しさという当時の大衆的意識を表していよう——わが国で 1885 年にはメスマルの著作が抄訳で出版されてもいた⁶⁾。また、宇宙にみなぎる磁気流体という考えは元型的イメージとも解することができる⁷⁾。1990 年代に類似の研究報告⁸⁾ が日本にもあることから、宇宙とひととの関係ないしはその相互作用という発想は、現代のこころの深みになお生きているのかもしれない。

さて、メスマルによる実際の治療とは、どういったものだったのか。彼はその仔細を報告していない。たとえば、「動物磁気発見の回想」⁹⁾ のなかでは、1770 年代の自験例にいくつか触れてはいるものの、彼の記述は動物磁気をめぐっての学界との格闘にいそがしく、患者名は自分の実績を語るために挙げているにすぎない。ただし、彼のもっとも有名で世間の関心をあつめた症例、盲目の女流音楽家パラディース (Maria Theresia von Paradis) については、先の論文のメスマルによる記述にくわえ、患者の父親による記録¹⁰⁾ という一次資料 (記載は 1777 年) があり、治療過程が唯一おえるものとなっている——なお、1994 年の映画『メスマル *Mesmer*』¹¹⁾ ではこの治療の様子が描かれており、俳優アラン・リックマン (ハリー・ポッター・シリーズのスネイプ先生) がメスマル役を演じた。ではこの治療過程をまとめてみよう。

Ⅲ 症例パラディース (マリア)、あるいは治療者メスマルとの物語

以下はメスマルと患者の父親という、立場の異なる 2 名の記録にもとづきつつ、パラディース伝記¹²⁾ も参照して、筆者なりに再構成したものである。父親の記録は、メスマルの論文のなかで公に

されたものであるから、メスメルが手を加えているかもしれない。とにかく筆者は、治療者メスメルにある程度同一視しつつも、脚色は最小限にとどめ、できるだけ俯瞰的な位置から治療経過を語るように努める。

【概要】

患者マリア・テレジア・フォン・パラディース（以下、マリア：1759～1824）は、法学を学びウィーン王宮で官僚を務める父ヨーゼフ（Joseph Anton von Paradis：1733～1808）と、舞踊家が多い家の出の母ロザリア（Rosalia Maria von Paradis：1739～1794）の一人娘で（父母の結婚は1755年）、3歳のときに黒内障（眼球には器質的異常が認められない視力障害）により失明した。これに両親は心を痛めて、名だたる医師によるさまざまな治療（薬草や電気ショック）を受けさせるなど娘の治療に熱心だったが、どれも成果はなく、逆にマリアの眼の形はくずれてしまい、けいれん発作を頻発するようになった。限られた教育のなかでも、マリアは音楽の才能を花開かせた。ついに女王（Maria Theresa Walburga Amalia Christina：1717～1780）の前で演奏する名誉に恵まれ、結果、女王からパラディース家に年金が支給されることになった。

一方、メスメルは当時、動物磁気の発見者としてウィーンで名を挙げつつあった。マリアの幼少期の治療に何度か立ちあっていたメスメルは、両親にたいしてマリアの病態改善の可能性を伝えた。これを機に、改めて治療が依頼されることになったのである。1777年、メスメルが42歳、マリアが18歳のときだった。

【経過】

1777年1月12日の治療1日目、メスメルはパラディース宅でマリアに動物磁気療法をおこなう。メスメルは手をかざし、マリアの顔や体に触れつつ、かの磁気流体が己を通じて彼女の体内を満ち引きするように施術する。マリアにもこの作用を意識するよう指示した。すると、マリアの四肢は震えはじめる。両眼に動きが生じ、顔は赤みがかかった。治療2日目、マリアは眼が見えないにもかかわらず、メスメルが杖で示す方向へ顔を向けるようになる。両眼の動きも増大。治療4日目、両眼の動きは落ち着く。すると、マリアの左眼が右眼よりも小さいことが観察できた（のちに治療により両眼の大きさは等しくなった）。

四肢の震えはしばらくして止んだが、経過とともに、マリアは後頭部に痛みを感じるようになる。針で刺されるようなこの痛みは頭の前方へと日々移動していき、ついに網膜に達した。それは、けいれんを伴うほどの痛みであった。下痢もおこる。機能不全となっていた嗅覚は、鼻からの緑色の粘液の排出とともに改善した。両眼の痛みはさらに増大していく。症状にめまいが出てきたことをメスメルは視力改善の兆しと見立て、治療の場を私邸にうつすことにした。

メスメル宅に滞在するようになったマリアの眼には包帯が三重に巻かれた。わずかな光もマリアには強い刺激になるとの配慮からである。両眼の痛みは徐々にかゆみへと変わったことから、メスメルは暗室で彼女の包帯をはずすことにした。そして、白い物体と黒い物体を交互に見て、そのときの眼の感覚の変化に集中するといった訓練がはじまる。こうした、自覚的に自分の眼で見るという機能回復訓練は継続しておこなわれ、見る物体の色も形もだんだん多彩にしていった。マリアは色の区別が可能になったが、黒いものを見ると盲目であった頃を思い出す、と悲しげになった。彼女はよく憂うつになるので、見る訓練はたびたび中断せざるをえなかった。

治療開始約1ヵ月後の2月9日、新たな視覚刺激として、マリアには暗室のなかで治療者メスメル

ルを見るという課題が与えられた。マリアは最初、ひとの姿形を恐がっていたが、ひとの鼻の形は妙におかしく思え、笑いをこらえることができなかつたほどである——愛犬を見たときは恐がらなかつた。ここで治療は次の段階へとすすむ。これまで手で触ってそれが何であるかを理解していたマリアは、この従来判断方法に、眼で見て認識するという新たな能力を合致させる課題に取りくんだ。これは大変骨の折れる作業であった。というのも、マリアは眼で見て物の距離を理解することができず（遠近・奥行が分からない）、自分に近づくものはそれ自体がだんだん大きくなる、と考えるほどに視覚的判断が未分化だったからである。学ぶことの多さにマリアは悲嘆にくれたが、メスメルは暖かく、動物磁気の助けもかりて彼女を鼓舞する。ようやく、マリアは昼の光を受け入れ、眼で見て距離を理解するまでになった。そのときの彼女は、人や物の微細な特徴を見逃さず識別できるほど、視力が敏感になっていた。

マリアの変貌を聞きつけ、見物人と学者がメスメル宅を訪ねるようになる。メスメルは、これら外部者の存在がマリアのプレッシャーになるのでは、と案じていた。まもなく、メスメルの治療成果をみにきた者から疑惑が起こった。見学中、眼で見ている物の名前を言うよう見学者が伝えたのに、マリアは回答することができなかつたので、彼女の視力はなんら回復していない、と。この噂は広まり、治療への誹謗中傷はおさまらない。すると、父ヨーゼフまで、視力が回復すれば年金がうちきられると懸念してなのか、マリアを自宅に引き取りたいとメスメルに言ってきた。強く要求する父親を目の当たりにし、マリアはけいれんを起こした。

娘のけいれん発生により一度は引きさがつたものの、父ヨーゼフは何度も引き取りを求めた。4月29日には母ロザリアまでもが同じ要求をしはじめた。メスメルは両親に、それが治療の中断を意味することを説明した。そうしたやりとりが聞こえたマリアは、再度けいれんして倒れた。母親はこの姿を見て、メスメルに味方しているとマリアを責め、暴力をふるう。こうなると、これまで落ち着いていた症状すべてがぶり返す。メスメル宅でのこの騒動は数時間おさまらず、マリアは嘔吐・けいれん・激情の発作が続き、再び盲目状態になった。

公職にある父親は、娘の件を王宮に持ちこんだ。その結果、5月2日、宮仕えの医師長からメスメルに対して、詐欺行為をやめてマリアを両親のもとへ返すように、との命令書がとどく。いまのまま自宅に戻ることは生命の危険がある、とメスメルが伝えると、両親もいくぶん反省したようで、そのままメスメル宅での治療継続を希望した。先の騒動から9日間で再燃した発作は終息したが、視力回復にはさらに2週間を要した。

その後、メスメルのもとに両親からの丁寧な詫言状がとどく。そこには治療にたいする感謝も綴られており、田舎への旅行に連れて行きたいので娘を一度自宅へ返してほしい、とあった。さらに両親からは、今度また娘の状態が悪くなればメスメルにケアをお願いしたい、とも書かれていた。そうして6月8日、マリアはメスメル宅をあとにし、両親宅へと帰っていった。半年の治療はここで終わった。

終結後、メスメルとマリアとの関係、治療者とパラディース家との関係は絶えた。マリアは盲目の音楽家として終生活動したという歴史をみるかぎり、彼女は再び暗闇の世界へと戻っていったようである。そしてメスメルは、パラディース家の令嬢への不適切な治療をしたヤブ医者とレッテルを張られ、翌1778年に妻をおいてウィーンを去り、活動の場をパリに求めたのであった。

IV 症例の解釈

上の記述それ自体に筆者なりの読みが含まれているものの、ここで立ちどまって、この物語を解釈する。解釈は、i) マリアの病理、ii) メスメルメスメルの病理、iii) パラディース家の病理、iv) 治療過程、の4点からおこなうが、18世紀の出来事であるため確認可能な資料も少なく、解釈の困難さは甘受せねばならない。また、記録のなかにマリアの語りや、症状以外の彼女のイメージ表現があれば、解釈はより深みをえるのだが、それらの一次資料がないのでここに着目することも諦めねばならない。

i) **マリアの病理**: マリアは、父親が仕える女帝から名をゆずり受けている。これは彼女には、父親から向けられた見えざる大いなる力であったことだろう。そして、少女から女性となり、音楽の道（と同時に女王からの寵愛を受け続ける道）を決心しようとしたとき、父親と同年代で、父親と一部同じ名前¹³⁾を持つ治療者が現れて、それも、見えざる万能な力で助けてくれるという。つまり治療者は、ある部分で父親の存在と同型かもしれないが、彼女にとって重要かつ新しい契機として体験されたはずである。したがって、治療者との関係が肯定的に進展したことは想像にかたくなく、彼女は治療者の期待に応えようと努力しただろうし、治療者の満足が彼女の満足であったにちがいない。治療という名のもとで自宅を離れることには、《幽閉された塔からの救出》というモチーフもみえてくる。このようにマリアには、父親世界の呪縛ともいえる特徴が根底にあったのだろう。さて、彼女の視力の異常が何らかの器質的なものによるのか、それとも心因のためなのか、筆者は解釈上の重要性をみない。現在の心因性視力障害の好発年齢は8～14歳で¹⁴⁾、時代が違っても心因で3歳に「失明」というのはあまりに早いと思われるし、「鼻からの緑色の粘液の排出」のように、一次資料のやや疑しく思えてならない箇所などを総合すると、視力障害の病因は判断保留とするのが賢明だと考えるからである。病因への過度の執着は解釈者の空想を満たすのみで、心因論者は本症例にヒステリー特性ばかりをみて、器質因論者は治療反応を《想像》と解するか動物磁気の批判に終始してしまう、と予想するからでもある。そして、治療過程のマリアの反応の多くは、動物磁気や催眠術、そして治療関係から十分説明できる（一部は第4の視点のところで論じる）。

ii) **メスメルメスメルの病理**: メスメルが大変に政治的かつ自己顕示的で、成功を猛烈に欲する人物だったことは、多くの資料からうかがえる特徴である。裕福な未亡人貴族ポッシュ（Maria Anna von Posch: 生没年不明）との結婚（1767年）は、当時は稀な方法でなかったとはいえ、社交界デビューと開業資金確保に目的があったとみえる。上流階級の仲間入りをして音楽家モーツァルトのパトロンまで務めることになった彼の関心は、今度は科学において自分の壮大な仮説を認めさせ、確固たる地位を獲得することへとうつったのだろう。したがって、ウィーンでのメスメルメスメルの成功は、女王のお気に入りの天才音楽家、王宮との太いパイプをもつパラディース家の愛娘の治療にかかっていた、といっても過言ではない。ところが、症例のなかのメスメルメスメルが治療を慎重にすすめていたことには注目したい。動物磁気療法のプロセスでマリアの状態像に進展が認められれば、その新しい状況におうじた心理教育を課題にし、粘り強く患者を支えているようにみえるからである——筆者の立場からするとメスメルメスメル主導の治療ではあるが。個人対個人という関係のなかでは、メスメルメスメルは良き治療者であり熱心な教育者である。彼は貧しい者たちの治療もおこなっており、有名な磁気桶（バケー）も彼なりの実践的工夫であったのだ。しかし、彼固有の特徴は《敵》を作らざるをえなかった。ま

ずは見物人のなかに。見物人が吹聴した悪評は、動物磁気仮説に向けられた批判である以上に、人間メスメルへの攻撃だったかもしれない。さらに、メスメルは患者の両親のなかにも不信を生む。患者との関係を維持・強化しつつ、患者の救世主になるためなのか、治療を私邸に変えたことを、両親はどこかで娘の強奪（敵対行為）と感じたのだろう。つまり、メスメルには動物磁気仮説を認めさせようとしたおなじ強引なやり方で、治療にあたっていた部分があった。治療者の私的な動因に無自覚であればあるほど、治療が危ういものになることはいうまでもない。

iii) **パラディース家の病理**：臨床心理学の多くの理論が伝えるように、家族とは一つの有機的なシステムであり、現在の家族の在りようとは構成員のあいだやその総和の力動から生じている。いまの家族の形には、ある面でそうである必然性が存在するのである。そのため、家族は身内に苦しむ者がいてもそのシステムの変化をきらう。患者（クライアント）個人が家族を憎み、心理療法に来て自分は「変わりたい」と訴えたとしても、もとの形を維持する家族の力に屈してか、結果としてクライアント個人も暗に家族の恒常に貢献することがある。こうした姿をわれわれは臨床場面で見ている。この特徴は、クライアントに変わることと変わらないこととをめぐる軋轢を生じさせ、セラピストには苦悩の発生地（とみえる家族）からクライアントを救い出すというインフレーションを呼びおこしとする。症例にもどると、メスメルが言うように¹⁵⁾、この治療の成功は年金支給やそのほかの恩恵を失う不安を家族に引きおこしたかもしれない。それはある部分で、家族にとって娘の眼は見えないままである必要があったということだ。ここには盲目の音楽家というブランドの維持だけでなく、いくらかでも娘の安定した将来（年金を確保すること）を望む、親なりの愛もあったと考えておきたい。この家族には激情して娘に暴力をふるう母親がいる。発作的な表現様式を、マリアはこの母親から引きついでいたのであろう。本稿では家族の背景を紹介していないため、これ以上の解釈は控えることにする。

iv) **治療過程**：最後に、上の3点をふまえて治療過程を読み解く。治療への反応は初日から認められた。マリアには動物磁気で温感が生じたと考えられるが、同じくらい、マリアはメスメルに触れられて頬を赤く染めたとも理解できる。初回で好意をもって治療者を迎え入れたのである。マリアは2日目には治療者の意図を察し、おそらく視覚以外の微細な情報を手立てに、眼前で指された杖先へ顔を向けている。メスメルは頭の痛みの出現を活用し、視力回復への暗示を強めていく。さまざまな身体症状の出現は、メスメルが見立てたように、治療進展にともなう体調悪化であろう。メスメル宅で治療をおこなうという提案に、マリアは《嫁入り》を思いえがいたかもしれない。察しのよいマリアは、メスメル夫妻の愛の希薄さをも感じとっていただろうから。視力が回復し、物体以外に最初にマリアの眼に飛びこんできたのは、治療者メスメルの姿だった。この刷りこみ(imprinting)のような過程で、マリアの内面にはこの中年男性(父親替わり)がさらに根づいていく。手で触って物事を判断していた彼女は、メスメルの顔にも触れ、ひとの顔(およびメスメルという人物)がどういったものかを確認したことだろう。鼻の形がおかしいという笑いのなかに、この接近法による恥じらいを彼女は隠したにちがいない。見学人が質問してもマリアは正しく答えられなかった。ただし、親密なメスメルの前では、マリアは眼が見える。ここまで治療が展開したとき、治療の破壊者としての両親が侵入する。娘マリアをメスメルから引き離そうとする。これを阻止するために、マリアはけいれんを起こして倒れる以外に、訴える手段はなかった。この手段のみ、われわれは臨床経験からヒステリー性の発作だと言うことができるだろう¹⁶⁾。治療成果を求めるメスメルに応じてもう一度状態をよくしたマリアだったが、今度はメスメルの口から治療中断について耳に

してしまう。家族の圧力のために患者を見放すという弱音を漏らした治療者、とマリアにはみえたことだろう。そうして、治療成果はマリアによって、あるいは家族の力動によって、もしくはメスマルの油断によって、ゼロにもどされる。そこから若干の状態回復をみせるも、両親宅に帰ったマリアには、治療前の状態にもどることが刻印づけられていた。治療は結局、眼で見ることは叶わないことをマリアが実感することで、幕を閉じた。

上の症例は、ラポールの発見と関係がないようにみえるかもしれない。ただし伝記などの資料から判断するに、メスマルは動物磁気の効力が最大となるよう治療をおこなう場の雰囲気にも注意を払い、患者が寄せる信頼にも目を向けていた。このことは、今日われわれがラポールとよぶものへの配慮であり、こうした配慮はマリアの治療のなかにも垣間みえるはずである。

V ポスト・メスマリアン (Post-Mesmerian)

前節の解釈は、依拠する理論の特徴によって、心理療道家の世界観の差異によって、批判を受けることだろう。その批判に備えることはしない。解釈の妥当性より、むしろここでは、心理療法を学び治療経験をいくらか積み、だれもがこのように事例（症例）の解釈をおこなえる点に着目したい。解釈の質はさておき、どうしてそれが可能かといえば、われわれは心理療法における治療者とクライアントとの関係を重要視するからである。心理療法は「人間関係を土台として行われる」仕事である¹⁷⁾。この事実を歴史的に考えるうえで、不十分な記録しか残っていなくとも、メスマルとマリアの物語は貴重といえる——だからこそ先行研究もいくつもある¹⁸⁾。この物語は、ヨーロッパでなされた近代心理療法史の最初期の記録というだけではない。われわれが現在おこなっている心理療法が20世紀の知に多かれ少なかれ染まっていることもあり、今日の治療記録のように既存の概念をとおして装飾される以前のもを提供しているのである。メスマルが自覚していようとまいと、これは人間関係による近代的治療（彼は非科学的な理論にもとづいているが）をおこなっていたことを、いまのわれわれに、学派のちがいを超えて知らしめるものなのである。

さらに、先述したメスマルの治療例にみえる特徴は、以後の心理療道家にも無関係ではなかった。歴史を閲すと、メスマルと似た現象へのはまりこみを、偉大な治療者の活動にもみることができる。たとえば、シャルコー (Jean-Martin Charcot: 1825 ~ 1893) の理論確立に貢献したヒステリーの女王ことルイズ・オーガスティン・グレースは、その発作が治療者の権威とル・サルペトリエールの風土による創作物であったことを示す。ブロイエル (Josef Breuer: 1842 ~ 1925) は新しい治療をアンナ・Oことベルタ・パッペンハイムとのあいだで試みたけれど、この女性患者から向けられる感情の強烈さにくじけて治療を中断した。フロイト (Sigmund Freud: 1856 ~ 1939) のドーラことイダ・パウアーの治療例は精神分析の必読の古典とされるが、そこには患者の父親と治療者との共謀、および治療過程において治療者の見立てを優先させる態度がうかがえる。ジャネ (Pierre Janet: 1859 ~ 1947) の症例マドレーヌが示した宗教的恍惚体験とは、まさに彼女が治療者に向けた表現でもあった。そしてユング (Carl G. Jung: 1875 ~ 1961) では、憑依を次第にユングの期待に沿って演じはじめた霊媒者 S.W. 嬢ことヘレーネ・プライスヴェルク、治療関係から恋愛関係へと変わったザビーナ・シュピールラインがいる。

上の例のいくつかに、程度の差はあれ筆者も似た経験を思いおこす。本稿で筆者の臨床例を具体的に挙げることはできないが、治療者とクライアントとの人間関係で驚き、困惑し、悩んだ経験は数えきれない。相手から操作されたと感じる事、あとになって治療者が相手を操作したと理解できることも多く、治療の外部へと向ける自分自身の意図や思惑も、正直になればなるほど否定できない。メスマルのように、治療の場を特別なものにしようと筆者も努めている。であっても、破壊的にもなりうる両名の人間関係が、つまり治療者とクライアントという二人の人格の出会いと交流が、あらゆる治療に共通する治療要因であったとの実感はある。経験が、人間関係を抜きにした心理療法はありえない、と断言させる。治療の難しさを生じさせ、捉えがたく、統制など許さず、強烈な疲弊を生むものであろうと、この人間関係を信じる事が治療者の仕事の支柱となっている。

したがって、今日のわれわれ心理療法家も、その専門家としての途を歩む以上、200年以上前のメスマルと同じ場所か似た場所を通らざるをえない。それどころか、繰り返しそこに立ちもどされる。おそらくどの治療者も、それぞれの心理療法のなかでメスマルと似た失敗と成功を味わい、挫折を経験し、ときに満足する。これは、いまではだれもが《ラポール》と簡単に口にできる臨床的事態によるものである。こうなると、われわれはメスマルを、単なるペテン師と呼ぶことはできない。だからこそ、シェルトークとソシユールもまた、治療関係の歴史を論じる冒頭にメスマルを据えているのであろう¹⁹⁾。彼らは同時に、「今日では、フランス語圏の治療者にとってこの語 [=ラポール]は何ら特別な価値をもっていない」と言う²⁰⁾。ラポールはあまりに普通のことばになり果てたわけだ。ただし、この事態の明暗をすでに知っているわれわれは、日本語でこれを「信頼関係」と訳すべきではないだろう。治療における重要性と、これに付きまとう苦々しさを含意させるために、「ラポール」とカタカナ表記にするか、せめて「交流」とするのが、現実在即していると思われる。

武野²¹⁾は心理療法と心理療法家につきまとう暗い影を、歴史的治療者を挙げつつ論じている。彼はその著書のなかでメスマルを、ペテン師(シャルラタン)的発想に基づいた者であり、受け入れがたい現実を前にすると逃避するか、現実と対峙せずに現実の方を変えようとする人物とみなし、神話賦与者としての心理療法家の実例とはみなしていない。しかしながら筆者は、ラポールの発見者としてメスマルを位置づけるという点にかぎって、現在の心理療法家はメスマルが残した知を受けつぐ者(ポスト・メスマリアン)と考えたい——たとえばシャーマンによる古代のこころの療法でも治療的人間関係は重要なものであったが。これは決して、無反省なメスマル賛美ではない。皮肉にも、メスマルがなにより大切にされた彼の動物磁気仮説を排して、心理療法における人間関係を重要視する、という点においてである。多くの学問で直接とりくんだ課題よりも、しばしば副次的な発見の方がのちに重要となるのと同じように、メスマルの業績もそれであった。また、筆者の位置づけは、虚言者メスマルが残した一抹の真実を貴ぶ姿勢を意味しているだけでもない。心理療法家は自らの影に自覚的であろうと努め、先達たちと自らの経験から学んだ結果、その治療に身を入れたまま同時に別の観点から当の人間関係を捉えよ(関与しながらの観察)、との訓戒をこの位置づけにこめているのである。

マリアとメスマルの物語で具体的なやりとりが史料として残っていないことは、メスマルが治療や患者を対象としてのみ考えていたという姿勢を、暗に示しているのかもしれない。「受け入れがたい現実を前にすると逃避するか、現実と対峙せずに現実の方を変えようとする人物」像は、メスマルの伝記から推測できる妥当な見立てであり、この特徴は自分を自分が捉えるという自己関係の希薄さをも示唆する。したがって、歴史的に有利である今日的な見地からすれば、ラポールという人

間的交流に自分自身が組み込まれ、そのことをさらに対象化するという姿勢が、メスメルには（当時には）あまりなかったのであろう。

VI ラポールを基点とする理論と実践

人間とは不可解で矛盾を孕んでいるので、当然、人間関係は複雑極まりないものになる。つまり、ラポールはまるで捉えどころのない事態といえる。ここまでラポールを、治療作用を生む一方で治療を破壊するものとしても捉え、この重要性を強調し、今日の心理療法はある部分ではメスメルの系統にあることを論じた。つぎに、心理療法家が実践を通じて、ラポールのさらなる概念化・理論化を試みた歴史へと目を向けよう。

心理療法の文脈では、フロイトの転移の発見こそが新たな段階への飛躍であった。転移はもともとドイツ語では Übertragung、英語では transference で、「移すこと」を意味しており、ラポールと同じように日常語にちかく、堅苦しいことばではない。フロイトの転移の考えは、1895年の『ヒステリー研究』にその萌芽をみせ、1905年の症例ドーラの論文で、「一連の過去の心的体験全体が、過ぎ去った体験としてではなく、医師という人物との現在進行中の関係として息を吹き返す」として地位をえた²²⁾。次いで、治療者がクライアントに向ける転移、つまり逆転移が発見され（1910年）、このことが治療者の訓練として教育分析（Lehranalyse）という発想へと向かう。ここから力動的心理療法の専門的組織化がすすみ、黄金期へといたったのである。

治療の場の人間的交流を意味するラポールに、転移という観点がもたらしたものは測りしれない。クライアントを守るだけでなく、危険なラポールの半身を担う治療者自身を守るうえでは、この転移仮説は大切になるためである。画期的だったのはラポールという関係を、個人と個人をむすぶ線から、広く面として捉えたことであろう。ただし、ラランシュとポンタリスがいうように、転移概念は「数多くの学者によってひじょうに広い意味につかわれ、患者と分析家との間の関係を構成する現象の総体を示すまでにいたっている」²³⁾。転移という考えの捉えには治療者それぞれの個性が反映するからこそ——ラポールも同様であろう——、転移は個別的な出来事で、さまざまな形で議論されるようになり、転移と逆転移の双方向性を強調して「転移／逆転移」と記されるようになった。ここまでの有名な貢献を挙げるなら、H. ラッカーの融和型同一視と補足型同一視や、ユングの錬金術プロセス、M. フォーダムの幻想的逆転移（神経症的逆転移）と同調的逆転移、H. コフートの自己対象転移、K. ランバートの同態復讐法（Talion Law）などがある。また広い意味で、D.W. ウニコットの抱えること、W.R. ビオンのコンテイング、N. シュヴァルツ＝サラントの関係の神秘などもあり、治療状況や治療構造の議論も含めてよいだろう。つまり、フロイト以後の力動的心理療法の歴史において、治療関係（それはラポールを基盤とする転移／逆転移の関係である）が主たる探究テーマでありつづけたのである。あるいは、このテーマに専門家たちは取りくまざるをえなかったのである。

こうした貢献により、理論と知見が治療者の手元に豊富にあったとしても、実際の心理療法は簡単ではない。クライアントの語りをただ聴くだけでは専門家とはいえず、専門家である以上、転移／逆転移をまったく無視して心理療法を続けることは困難である。とはいえ、治療進行中の自らのケースについて、その治療関係を饒舌に語る治療者は、どこか信用ならないように思われる。プレイ

ヤーと解説者とを同じ位置におけないように、転移／逆転移という武器をやたら使う治療者は、治療関係から離れたところから話す傾向が強いのか、その関係に身をおく比重がとてもし少ないか、生の人間的交流を理論で解剖している、という印象をあたえる。

患者 - 治療者の力の関係について、グッゲンビュール＝クレイグは警鐘を発している²⁴⁾。彼は「二人の人間の出会いで、一方が病気であり、もう一方は治療者であるという状況は一般的なものであって、人類が生まれて以来くり返しくり返し布置されてきたものである」とし、治療者による患者（クライアント）の支配や、治療者の自らの神格化、というリスクがそこにはあるという。そして、治療における患者（クライアント）と治療者という対を意識しつつ、治療進展には、治療者が内なる《患者》を外在化することなく患者（クライアント）のなかの《治療者》が活性化することが大切と考える。こうした治療を考えるなら、強い転移（と逆転移）だけでなく、深い転移（と逆転移）という視点をもつことが重要になってくるのである²⁵⁾。

上述の実践知の発展は、面として捉えていた治療関係をさらに、立体的（空間的）なものとしてみようとしている、と考えることができるだろう。このことが、クライアントの表現を一義的に受けとるのではなく、そこに内包された言外の意味に治療者の目を向けさせ、治療者に開いた態度を要請することになる。

強い転移は目立ち、気づきやすい。そして、理論で知的分析をおこなう対象となりやすい。さらに、治療者は身を守ろうと概念を駆使する。筆者にもラポールと治療関係を知的に秩序づけした経験は多くある。ときにこの衝動が強力であることから推測するに、どの治療者にもこの秩序づけを欲する気持ちがあるようだ。《分かった》方が優秀な治療者だと、《説明できた》方が治療的だとも思えてくる。治療者がこの誘惑に振りまわされず真に治療的に存在しようとするときに、メスメルが発見したラポールが生きてくる。治療者もそこに組みこまれていくというラポールの主体性、ラポールというものに多くの天才たちでさえ巻きこまれて苦勞したという史実、ラポールが創造的でありかつ破壊的であるとの洞察、そしてラポールは転移／逆転移の基盤でありながら不可解な生のものでありつづけるという事実、これらを改めて銘記するためである。したがって、メスメルという《歴史》は、いまの治療関係を理解しようとするわれわれにとって一つの回帰点になる。さらに、世阿弥が『花鏡』で「是非初心不可忘・時々初心不可忘・老後初心不可是非」と述べているがごとく、メスメルという《歴史》は、心理療法家個人の成長における一つの初心なのであり、また心理療法（史）においても初心になりうるのである。

VII おわりに

本論文では、心理療法の歴史をベースに、メスメルを端とするラポールの今日的意義を考察した。同時に本稿は、筆者個人のささやかな成長の意識化に取りくむものでもあった。

臨床経験も踏まえて論をすすめたが、一つ不満を残した。ラポールを考えるうえでメスメルを最初の窓口と位置づけることは自然ではあっても、特に転移／逆転移という点で主にヨーロッパの知に依拠せざるをえなかったことである。西洋の転移／逆転移の論の多くは、それぞれを考えた場合には一応の納得がえられる。ただし、ここに一般論はないと知りつつも、それらの知は治療者としての筆者の実感および筆者の臨床例と十全に合致しないところがある。もし、これが日本人の精神

性というものと関係しているならば、本稿で論じたラポールの一部は、より日本的に描出できたかもしれない。ラポールが個人対個人によってなりたっていて、その意義が薄らぐことはない。それでも、この課題の前進のためには、心理療法でのラポールと治療関係をトポスという観点から論じる方が、日本人のところに適しているように感じるからである。心理療法家は自らの臨床観を自らの経験にもとづいて形成していくものなので、これは今後の課題とせねばならない。

註

- 1) Ellenberger, H.F. (1970): *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. New York: Basic Books. 木村敏ほか監訳 (1980) 『無意識の発見——力動精神医学発達史』 弘文堂、上巻、117 頁。
- 2) Mesmer, F.A. (1980 [1766]): *Physical-Medical Treatise on the Influence of the Planets [De planetarum influxu in corpus humanum]*. *Mesmerism: A Translation of the Original Scientific and Medical Writings of F.A. Mesmer*. Los Altos: William Kaufmann, pp.1-30. Tr. by G. Bloch.
- 3) メスメル伝記は Zweig, Darton, Buranelli, Thuillier による邦訳がある。メスメリズム (メスマルの世界観や治療論、あるいはその支持者) が文化に与えた影響については Tarar の訳書が詳しい。メスマルをめぐる心性史研究としては實川による成書がある。これらの資料は、後に記すパラディース嬢の症例理解においても参考にした。なお、同じ動物磁気者 Puységur 公爵の邦訳も 1 件ある。
Zweig, S. (1931): *Die Heilung durch den Geist: Mesmer, Mary Baker-Eddy, Freud*. Leipzig: Insel. 佐々木斐夫ほか訳 (1973) 『精神による治療 (ツヴァイク全集 12)』 みすず書房。
Dartton, R. (1968): *Mesmerism and the End of the Enlightenment in France*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 稲生永訳 (1987) 『パリのメスマー——大革命と動物磁気催眠術』 平凡社。
Buranelli, V. (1975): *The Wizard from Vienna*. London: A.M. Health & Company. 井村宏次ほか訳 (1992) 『ウィーンから来た魔術師——精神医学の先駆者メスマーの生涯』 春秋社。
Thuillier, J. (1988): *Franz Anton Mesmer ou l'extase magnétique*. Paris: Robert Laffont. 高橋純ほか訳 (1992) 『眠りの魔術師メスマー』 工作舎。
Tarar, M.M. (1978): *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 鈴木晶訳 (1994) 『魔の眼に魅せられて——メスメリズムと文学の研究』 国書刊行会。
實川幹朗 (2013) 『心の近代——三筋の結界とメスメル 支度の段』 北大路書房。
Puységur, M.de (1837): *Teaching the Method of Magnetizing*. In J. King (Ed. & Tr.), *An Essay of Instruction on Animal Magnetism*. New York: J. C. Kelley, pp. 57-81. S. Groemer 訳 (2010) 「磁気作法の教育的小論」『医療分野における催眠術の起源と展開——古代エジプトからシャルコーまで』 36-44 頁。
<https://www.academia.edu/32882309/>
- 4) Mesmer, F.A. (1980 [1779]): *Dissertation on the Discovery of Animal Magnetism [Mémoire sur la découverte du magnétisme animal]*. *Mesmerism: A Translation of the Original Scientific and Medical Writings of F.A. Mesmer*. Los Altos: William Kaufmann, pp.41-78. Tr. by G. Bloch. p.68.
- 5) 近藤嘉三 (1884) 『魔術と催眠術』 頌才新誌社。
- 6) メスマー著・鈴木万次郎譯述 (1885) 『動物電気論』 十字屋。※原著不明
- 7) 武野俊弥 (2005) 『嘘を生きる人 妄想を生きる人——個人神話の創造と病』 新曜社、209 頁。
- 8) 長嶋鋼典 (1993) 「老年精神病患者の死と太陽系の相関 (2)」『日本心理学会第 57 回大会発表論文集』 215 頁。
- 9) 前掲書 4。
- 10) 前掲書 4、pp.71-76。
- 11) Spottiswoode, R. (Director) / Potter, D. (Writer) (1994): *Mesmer*. First Look Studios & Cineplex Odeon Films.
- 12) Fürst, M. (2005): *Maria Theresia Paradis: Mozarts berühmte Zeitgenossin*. Köln: Böhlau.
- 13) 象徴的に意義深い。両名のミドルネーム Anton は、ギリシア神話の好戦的な巨人アンタイオス (Antaeus)

に由来する。海神ポセイドンあるいは大地母神ガイアの息子であるアンタイオスは、英雄ヘラクレスに絞め殺された。また、Anton は古代ローマのファミリーネームであるアントニウス (Antonius) から派生したもので、「計り知れない価値をもつ」や「価値のないもの」を意味し、ギリシア語の ἄνθος (anthos: 花) にさかのぼることができる。

- 14) 山出新一 (2001) 「心因性視力障害」『小児科臨床』Vol.54・No.12、2296-2299 頁。
- 15) 前掲書 4、p.60。
- 16) 山中康裕 (1996) 「ヒステリー」日野原重明ほか (監修) 『今日の治療指針 1996 年版』医学書院、258 頁。
- 17) 河合隼雄 (2001) 「心理療法における転移／逆転移」河合隼雄 (編) 『心理療法と人間関係 (講座心理療法 第 6 巻)』岩波書店、1-23 頁。
- 18) たとえば次の論文がある。
 Pattie, F.A. (1979): A Mesmer-Paradis Myth Dispelled. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 22 (1), 29-31.
 Evers, S. (1991): Der Fall der Maria Theresia Paradis (1759-1824). *Klinische Monatsblätter für Augenheilkunde*, 199 (2), 122-127.
 Makari, G.J. (1994): Franz Anton Mesmer and the Case of the Blind Pianist. *Hospital & Community Psychiatry*, 45 (2), 106-110.
- 19) Chertok, L. et Saussure, R. de (1973): *Naissance du psychanalyste: de Mesmer à Freud*. Paris: Payot.
 長井真理訳 (1987) 『精神分析学の誕生——メスメルからフロイトへ』岩波書店。
- 20) 前掲書 19、20 頁。
- 21) 前掲書 7、131-137 頁。
- 22) Freud, S. (1991 [1905]): Bruchstück einer Hysterie-Analyse. *Gesammelte Werke, Bd 5*, 7.Auflage. Frankfurt am Main: S. Fischer. 渡邊俊之ほか訳 (2009) 「あるヒステリー分析の断片 [ドーラ]」『フロイト全集 6』岩波書店、152 頁。
- 23) Laplanche, J. et Pontalis, J.B. (1976): *Vocabulaire de la psychanalyse*. Paris: Presses Universitaires de France. 村上仁監訳 (1977) 『精神分析用語辞典』みすず書房、333 頁。
- 24) Guggenbühl-Craig, A. (1978). *Macht als Gefahr beim Helfer*, 3.Aufl. Barel: S. Karger. 樋口和彦ほか訳 (1981) 『心理療法の光と影——援助専門家の〈力〉』創元社、111-112 頁。
- 25) 前掲書 17。

(常葉大学健康プロデュース学部准教授)